

■ウインド Etc. (風のエトセトラ)

ジョシュア・ツリーの風景から (その3)

— 個人的カリフォルニア紀行 —

GL Garrad Hassan 内田 行宣

車社会アメリカ合衆国へようこそ

今時は、旅行や留学、仕事等で多くの方が米国への渡航を経験されているから、米国が車社会であることは皆知っているだろう。

私が日本から米国に到着した当初は、日本から持ってきた国際免許証を使っていた。しかし、地元の警察に止められて国際免許証を提示したところ、現地の免許証を取得するよう指導されたという先輩社員の勧めで、まず筆記試験会場へ向かった。事前申込など必要なく、その場で20ドルかそこら払えば、すぐに受験出来た。英語で書かれた問題集で準備していったところ、日本語での受験も可能と分かったが、かえって日本語の引っ掛け問題にやられることを怖れて英語で受験した。何と満点だった。次は実技。自分が運転する車と保険証書を持っていき、試験官が乗り込んで試験開始となる。「ハザードランプ点灯して」と言われた英語が分からず試験官が点灯ボタンを押した他には、これといった失敗もなく、実技終了ポイントに戻る前の車中で試験官から「合格おめでとう」と言って貰えた。多くの人に容易に免許証を発行するお国柄だと思った。

レンタカーは、最初のうちは専らコンパクトが一番安いのを借りていた。助手席側のサイドミラーがない車に遭遇した時は驚いた。その車には、スペアタイヤが積んでなくて、しかも運悪くウインドファームサイトで何か変なものを踏みつけたらしく、砂漠の真ん中でパンクして立ち往生してしまった。砂漠の中の道で止まっている車を見かけても、決して止まっただけはいけない、銃で脅されて身ぐるみ剥がされてしまうからと、やはり先輩社員から言われていたが、自分が待ち受ける羽目になってしまった。案の定、誰も止まってくれない、と途方に暮れていたところ、”SHERIF”とペイントされたパトカーが止まってくれた。シェリフは「何だ、パンクかよ」とすぐに無線で近所の修理工場に連絡してくれ、程なくしてレッカー車が来てくれて助かった。爾来、レンタカーのスペアタイヤの有無には気をつけるようになった。

ある時、コンパクトやエコノミーサイズのレ

ンタカーがなくて、車種を問わないからなんでも貸してくれといったら、キャデラックに当たってしまった。ウインドファームの警備員のおばちゃんとは顔馴染みで通行許可証も持っていたけど、その時ばかりは言われてしまった。「あんた、キャデラックは進入禁止だよ」って。勿論冗談だったが。この仕事でキャデラックに乗っても、乗り心地を愉しむことは出来ないことはお分かりいただけるだろう。

RIGHT OF WAY

砂漠の中の田舎道の交差点には、信号がないところが多い。こういう場所では、”Right of Way” といって、先に交差点に到達した車に優先通行権がある。交差する両方向から同時に2台の車が到達した際には、運転席から見て右側の車に優先通行権がある。筆記試験でこの問題が出たのをよく憶えている。「Right of Way について正しく説明している文章を次の3つの中から選べ」という。正解は”Do not insist at all” である。

アメリカらしい光景

アメリカの素晴らしい大自然については、別の機会に触れたいが、車からの光景で忘れられないものを挙げたい。ひとつは、長い貨物列車が通過する間の踏切待ち。冗談でなく、10分かそれ以上待たされる。もうひとつは、パトカーと麻薬所持容疑者のカー・チェイス。メキシコからサンディエゴを抜けて入ってくる車をチェックする検問所があるが、スリル溢れるカー・チェイスも、逃げ損ねて大破・炎上している車も見かけたものである。

車三昧の生活の敵

生活習慣病とはよく考えて付けられた名前だといつも感心してしまう。車社会の大敵は、ズバリ肥満である。米国のスーパーマーケットで低脂肪牛乳や低脂肪ヨーグルトがずらりと並べられているのには辟易とした。しかし、太ってしまった自分の姿が最悪だった！

(次号につづく)